



TITLE:

蘇軾の歸田と買田

AUTHOR(S):

湯淺, 陽子

CITATION:

湯淺, 陽子. 蘇軾の歸田と買田. 中國文學報 1997, 54: 36-69

ISSUE DATE:

1997-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177796>

RIGHT:

蘇軾の歸田と買田

湯 淺 陽 子

京都大學

北宋の蘇軾（一〇三六—一一〇一）字子瞻 號東坡居士は、その官としての長く波亂に富んだ生涯のなかで、自らの精神の平穩を求めるために、當時にあっては現代思想と言ふべきものであった觀物（外界の哲學的觀照）や佛道の思想の攝取や實踐、また官としての日々の暮らしの中に個人的な快と修養を求める「吏隱」を試みるなどしている。そこで小稿では、そのような心のよりどころの一つであったと思われる、故郷への歸還の希求について考察したい。蘇軾の故郷は眉州眉山縣（現四川省眉山縣）であり、その實家は城内の紗縠行にあったとされるが、蘇軾の詩文には生涯を通じて、この故郷への思いが表現されている。もとより望郷の念は、哲學的觀照や宗教的修養のように思想としての性格の強いものではなく、より感傷的な方向に傾くものであつ

て、また士大夫だけではなく、人間一般に普遍的な感情とも言うべきものでもあるが、それゆえにこそ、そこには思想にまで昇華しきれない内面的な葛藤を見ることができているのではないだろうか。

さて「歸田」という語の使用の早い例としては、後漢・張衡の「歸田賦」を挙げることができるだろう。この題について『文選』卷十五で唐・李善は、「歸田賦者、張衡仕不得志、欲歸於田、因作此賦。凡在曰朝、不曰歸田。（歸田賦は、張衡仕へて志を得ず、田に歸らんと欲し、因りて此の賦を作る。凡そ在りては朝と曰ひ、歸田と曰はず。）」と注している。これによれば「歸田」とは仕えて志を得ない官人が、朝廷から離れて田園へ歸還することであり、この賦の内容もまた、志を得られない朝廷からの歸還と、その鬱屈を穩やかに開放する場である田園での狩獵と修養の次第を述べるものである。故郷から離れて官界で活躍する者や、それを願う者がその主要な作者である中國の古典詩文において、その後この「歸田」はテーマのひとつとして繼承され、晉・陶淵明の「歸去來辭」などの作品を生み、また唐以降の

文學においても繼承されていった。

「歸田」は多くの場合、氏族の本據地の田園や故郷への歸還を思ふものであるが、しかし張衡の「歸田賦」には、この田園が作者の故郷であることを示す表現が見られず、また晉・石崇「思歸引序」（文選卷四十五）が思ふのが「河陽別業」への歸還であるように、生まれ故郷以外の土地がその対象とされる場合も存在する。これらの例も含めて考えると、「歸田」の先として最優先される條件は、そこで作者が心の安寧を得られることであり、そのためには必ずしも生まれ故郷でなければならないわけではない。しかし『文選』の諸作品の制作された漢・魏・六朝期の氏族制社會においては、田園も別業も彼らの屬する氏族の所有物であり、たとえ本據地と離れた場所にあったとしても、氏族の本據地の田園や屋敷の延長上にあるものとして感じられていたのではないだろうか。

さて、論者は先に密州期を中心に蘇軾の吏隱について考察し、「西齋」詩（合註卷十三）、「和文與可洋川園池三十首」の「北園」詩（合註卷十四）等の表現によって、「蘇軾は白居易

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

易の吏隱の型を模倣しつつも、それに満足しきることができず、陶淵明の歸田を理想とする方向に傾いている。」と指摘したが、蘇軾のこのような表現も文學における「歸田」というテーマの繼承と言えよう。それを受けて、ここではさらに考察の対象を蘇軾の生涯全體に廣げ、歸田の文學化の様相について、吏隱との關係、また當時の士大夫に顯著な買田の風潮をも視野に入れて考察したい。

一 吏隱と歸田

さて、北宋中期においては、社會の安定と廣い層における經濟的な豊かさを背景にして、大官たちは言うまでもなく、群小の士大夫たちの間でも閑居において個人的嗜好を追求する風潮が一般化し、庭園、亭臺の造營、書畫、古物の収集などが盛んに行われている。一例を挙げるならば、神宗期に參知政事に至った趙抃（一〇〇八―一〇八四）『宋史』卷三百十六有傳の「題中隱堂二首」詩（清獻集）卷五）其一は、その「中隱」という堂の名にすでに白居易の「中隱」の影響を窺うことができるが、

動跡無凝靜性通 動跡 凝る無く 靜性通づ

小松疎竹一堂風 小松 疎竹 一堂の風

憑山倚市何須問 山に憑くと市に倚ると何ぞ問ふを

須たん

不隱形骸惟隱中 形骸を隠さず 惟だ中に隠るのみ

という詩句もまた、吏と隱の場の中間を自らの閑居の場所とし得るという、白居易風の考え方の受容を示している。

周知のように、白居易は中唐期において、自らの官としての意識と個人的な隱居の志向を兩立させる閑居の場を、人間から離れた所ではなく、左遷地の官舎や洛陽履道里の庭園に求め、本來は他から強制された志を得ない状態を指すものとして否定的なニュアンスを帯びていた吏隱を、自らが手にした高官としてのアイデンティティーを保ちながら樂しめるものとして肯定しなおすことを試みたのであるが、このような白居易流の吏隱の概念は、その後、同様に官としての意識が定着していた宋代の士大夫たちに、廣範に浸透したと思われる。

また地方官の閑居のための建物に「吏隱」「中隱」等の名

を付ける早い例としては、劉禹錫が連州に作った「吏隱亭」を擧げることができるが、北宋期に入ってその例が増えるのも、これらの言葉と概念が士大夫層に普及していたことを反映するものだろう。『全宋詩』（北京大學出版社 一九九一）第二十五冊まで既刊）に見える詩題からその例を拾うならば、魏野（九六〇～一〇二〇）「題陝府同判衙吏隱亭」（卷八十六）、梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）「張侍郎中隱堂」（卷二百三十三）、同「寄題楊敏叔虢州吏隱亭」（卷二百六十二）、邵雍（一〇一～一〇七七）「内鄉兼隱亭」（卷三百七十五）、司馬光（一〇一～一〇八六）「和趙子與龍州吏隱堂」（卷五百六）等を擧げることができる。

またさらに言うならば、官吏としての日々の生活の中に自らの心の安まる場所を求めようとする「吏隱」の概念が、このように廣範に受け入れられたことは、從來士大夫たちの心の據り所となっていた故郷や田園の引力が減退していることも反映しているのではないだろうか。つまり白居易風の「吏隱」の成立とその廣範な受容は、故郷の氏族や土地よりも現在の自分自身の生活により強い關心を向けると

いう、士大夫層の意識の變化に關わるものと言えるのではなからうか。

*

では蘇軾の場合はどうだろうか。眉山の蘇氏は、進士を出したのは蘇軾の父蘇洵（一〇〇九～一〇六六）の兄渙（一〇〇一～一〇六二）が初めてという、新興地主であり、蘇軾、轍（一〇三九～一一二二）の兄弟もまた、當時の大方の士大夫層と同じく、科擧及第による社會的上昇を求めたのである。

まず蘇軾の「吏隱」、官吏の閑居に對する意識についてであるが、蘇軾は官界での活動の開始である鳳翔府簽書判官事への赴任（嘉祐六年 一〇六二）中から、既に官舎での閑居を試み、岐下（現陝西省鳳翔縣）の官舎に營んだ庭園の様子を、「新葺小園二首」（合註卷四十九（非編年）。王文誥『蘇文忠公詩編註集成』は卷三「次韻子由除日見寄」の次に配列する。）に次のように記している。

短竹蕭蕭倚北牆 短竹は蕭蕭として北牆に倚り
斬茅披棘見幽芳 茅を斬り棘を披きて幽芳を見はす

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

使君尙許分池綠 使君は尙ほ池の綠を分かつを許し
隣舍何妨借樹涼 隣舍は何んぞ樹の涼しきを借るを

妨げん

亦有杏花充窈窕 亦た杏花の窈窕に充つる有り
更煩鶯舌奏鏗鏘 更に鶯舌の鏗鏘を奏するを煩はす
身閑酒美誰來勸 身は閑 酒は美し 誰か來りて勸

めん

坐看花光照水光 坐ろに看る花光の水光に照るを

まず第一首目では、自分の手で整備し、その美しさを開發した庭園が、周圍の人々の好意を感じ、花鳥にも親しさを感じる幸福な空間であると述べている。ここでは「吏隱」「中隱」といった語こそ用いられないものの、この蘇軾の官舎の庭園もまた、當時の士人たちが好んだ「吏隱」を實踐する場であったと言える。

次に、二首目を見てみよう。

三年輒去豈無鄉 三年 輒ち去り 豈に郷無からん

や

種樹穿池亦漫忙 樹を種え池を穿ち亦た漫りに忙た

り

暫賞不須心汲汲 暫らく賞して須らく心汲汲たらざ

るべし

再來惟恐鬢蒼蒼 再び來れば惟だ恐る鬢の蒼蒼たる

を

應成庾信吟枯柳 應に庾信の枯柳を吟ずるを成すべ

し

誰記山公醉夕陽 誰か山公の夕陽に酔へるを記せん

去後莫憂人剪伐 去りし後 憂ふ莫かれ人の剪伐す

るを

西鄰幸許庇甘棠 西鄰 幸ひに甘棠を庇ふを許す

ここでは、自分のこの庭園での幸福な閑居が當地に在中のみの一時的なものでしかなく、この庭園もまた自分が離任した後は姿を變えてしまうであろうと、自己とこの閑居の場との邂逅がつかの間のものでしかないことが予感されている。一首目の末尾に描かれた、花の上に照る水面の反射光の不確かな揺らめきは、あるいはこの幸福な樂園のはかなさを暗示するものかもしれない。

さて、この詩に見られるような、官舎の庭園がいかによばらしい吏隱の場であつても、それは自分にとって假のものでしかないという考え方は、先に挙げた拙稿で既に考察したように、後の時期の作品である「西齋」詩（合註卷十三）や「和文與可洋川園池三十首」詩（合註卷十四）にも表現されるものであり、それらの作品では吏隱の彼方に將來の歸田を理想として思い描いている。この「新葺小園二首」のように既に鳳翔期の作品においても蘇軾が自分の歸田に言及していることは、吏隱を將來果たされるべき歸田の先驅けとして捉えようとする考え方が、「西齋」詩などが制作された知密州期のみではなく、彼においては、かなり若年期から抱かれていたものであることを示すものと言えよう。次に鳳翔在任期の蘇軾の作品に見える歸田への言及の例として、さらに「題寶雞縣斯飛閣」詩（合註卷三）を挙げてみよう。

西南歸路遠蕭條 西南の歸路は遠くして蕭條たり
倚檻魂飛不可招 檻に倚れば魂は飛びて招くべから

ず

野潤牛羊同雁鶩
天長草樹接雲霄
昏昏水氣浮山麓
汎汎春風弄麥苗
誰使愛官輕去國

野は潤く 牛羊は雁鶩と同じく
天は長く 草樹は雲霄に接す
昏昏たる水氣は山麓に浮き
汎汎たる春風は麥苗を弄ぶ
誰か官を愛して輕がるしく國を去らしめんや

此身無計老漁樵 此の身 漁樵に老いるに計無し
故郷の蜀への歸路ははるかに遠いが、樓閣の欄干に凭れて遙か彼方を望めば、心が故郷へ向かうのをとどめようもない。寶雞縣の廣々とした天地は動植物の生命に満ち、かすみの立つ山邊の田園には穩やかな春風が麥の苗を吹いていく。しかし蘇軾はこの光景に心満たされることなく、官吏に懂れて後にしてしまった、もはや歸ることのできそうにもない遙かな故郷への歸還を思っている。

また「二十七日、自陽平至斜谷、宿于南山中蟠龍寺」詩（合註卷四）には次のような表現が見える。

門前商賈負椒苻 門前の商賈は椒苻を負ひ
山後咫尺連巴蜀 山後は咫尺にして巴蜀に連なる

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

何時歸耕江上田 何れの時にか歸耕せん江上の田
一夜心逐南飛鵠 一夜 心は南飛の鵠を逐ふ

この部分で蘇軾は、寺への遊山の折りに目にした商人の商う蜀の名産品に望郷の思いを掻き立てられ、その寺の裏から續く山並みがすぐに蜀へ續いていると感じている。

さて、この二つの詩の表現に共通するのは、自分の眼前の道や山並みの先に故郷の存在が確信され、いつかそこへ歸ることを願うという点である。初めての任官に希望で胸を膨らませていたかと思われる時期から、既に歸田を願う表現がいくつも見られるのは、士大夫においては常に、官としての社會的活動への欲求とともに、穩やかで自足した隱的生活への憧れが共存していることを反映するものだろう。

さて、鳳翔期以後、御史臺入獄までの蘇軾の詩文に見える吏隱と歸田の關わりへの言及には大きな變化は見られず、將來の故郷への歸田を願う表現が繰り返されている。例として杭州通判期の「六月二十七日望湖樓醉書五絕」其五（合註卷七）を挙げよう。

未成小隱聊中隱 未だ小隱を爲さず 聊か中隱す
可得長閑勝暫閒 長閑の暫閒に勝るを得べけんや
我本無家更安往 我 本 家無ければ更に安くにか

往かん

故郷無此好湖山 故郷 此の好湖山無し

連作詩の最終首であるが、これは連作の其一から其四で、西湖を豊かな自然に恵まれた樂園として描寫したのを踏まえた表現である。この起句の表現にも、今までに見た詩と同様の、本來中隱（吏隱）は假のものであり、將來の小隱（ここでは故郷への歸田）こそ最終的な目的であるとする考え方を見ることが出来る。しかし續く承句では、この風光明媚な西湖においてはその價值觀が逆轉し、しばしの吏隱が、故郷での長い隱居生活よりもずっとすばらしいものとなると述べられている。つまり、西湖の美しさは、故郷への歸田を願う心さえ魅了する特殊なものなのである。さらに轉句・結句では、故郷にはこのようなすばらしい景觀はないので、この風光明媚な杭州にとどまっていたいと、故郷への歸田を放棄してみせている。このような表現は、當時の

士大夫の間に存在した、故郷以外の氣に入った土地を自分の歸田の場とする風潮とも關わるものであろうが、ここでも蘇軾の意識においては、やはり故郷への歸田こそが本來優先すべきものとされている。

また「自昌化雙谿館下步尋谿源、至治平寺二首」其二（合註卷九は、

每見田園輒自招 毎に田園を見て 輒ち自ら招く
倦飛不擬控扶搖 飛ぶに倦み扶搖を控するを擬へず
共疑楊惲非鋤豆 共に疑ふ 楊惲が豆を鋤くに非ざるを

誰信劉章解立苗 誰か信ぜん 劉章が苗を立つるを解するを

老去尙貪彭澤米 老い去りて尙は彭澤の米を貪り
夢歸時到錦江橋 夢に歸りて時に錦江の橋に到る
宦游莫作無家客 宦游して無家の客と作る莫かれ
舉族長懸似細腰 族を舉げて長く懸かるは細腰に似たり

と述べるが、これは其一の第七、八句で「正似醴泉山下路、

桑枝刺眼麥齊腰。(正に似たり醴泉山下の路の、桑枝眼を刺して麥腰に齊しきに。)」と、綠豊かな山里の風景が故郷眉州にそっくりだと述べたのを受けて、歸田の夢想を述べているのである。故郷を思わせる風景は自然に、故郷への歸田の憧れを募らせる。諸注に従ってこの二首目の概要をまとめれば、およそ次のようになるだろう。「六朝期の招隱詩と陶淵明の隱棲に憧れ、旋風を乗り回すような高い官位に昇りたくはないと思う。しかし素直に歸田、歸隱の望みを詩に表現しても、世間はその裏に朝廷への風刺があるので疑う。陶淵明のように冠を擲って歸田すべきなのに、この状態ではそれもできず、夢の中でしか蜀へ歸れない。定住する場所もない官吏などなるものではない。腰に家族を長々とぶら下げてあちらこちらと移動するのは、まるで蜂のようではないか。」

つまり儒教の倫理の中では、隱居すべき時とはすなわち世の亂れている時であるから、歸田歸隱の願いを詩に表現することは、それだけで政權擔當者には政治・社會批判と解釋され得るのである。密州、徐州、湖州期の蘇軾の詩に

蘇軾の歸田と買田(湯淺)

歸田の願いの表現が徐々に少なくなるのは、新法を掲げる政權擔當者との對立の深まりを反映するものだろう。また當時洛陽に歸田閑居していた司馬光の獨樂園に寄せた「司馬君實獨樂園」詩(合註卷十五)の末尾では、退隱して政界に對して發言しようとしないう司馬光を、「撫掌笑先生、年來瘖啞。(掌を撫でて先生を笑ふ、年來瘖啞に效へりと。)」と非難しているが、そこには當時の蘇軾自身のまつりごとへの意志の高まりを見ることができるといえる。

二 黃 州

次に黃州期の狀況について考えよう。この黃州流謫は、蘇軾が詩のなかで新法を推進する勢力を誹謗したと嫌疑をかけられた筆禍事件、いわゆる烏臺詩案によるものだが、黃州へ向かう途上で制作された「正月十八日蔡州道上遇雪、次子由韻二首」(合註卷二十)其一では、黃州での買田の可能性が、蜀の回想と對比されている。

蘭菊有生意 蘭菊 生意有り
微陽回寸根 微陽 寸根に回る

方憂集暮雪	方に憂ひて暮雪を集め
復喜迎朝暉	復た喜びて朝暉を迎ふ
憶我故居室	憶ふに 我が故居の室
浮光動南軒	浮光 南軒に動けり
松竹半傾瀉	松竹 半ば傾瀉し
未數葵與萱	未だ葵と萱とを數へず
三徑瑤草合	三徑 瑤草合し
一瓶井花溫	一瓶 井花溫かし
至今行吟處	今に至るに行吟せし處
尙餘履舄痕	尙ほ履舄の痕を餘せり
一朝出從仕	一朝 出でて仕に従ひ
永愧李仲元	永く李仲元に愧づ
晚歲益可羞	晚歲 益ます羞づく
犯雪方南奔	雪を犯して方に南へ奔らんとす
山城買廢圃	山城 廢圃を買ひ
槁葉手自掀	槁葉 手づから掀す
長使齊安人	長く齊安の人をして
指說故侯園	指して故侯の園と説かしめん

回復してきた微かな日差しを根に受けて生氣を取り戻した蘭と菊は、死を覺悟した御史臺の牢への投獄から解放された、蘇軾自身と重なるであろう。彼がここで思い出す故郷の家は、南軒に搖らめく光、傾きかけた松竹、美しい草で覆われた「三徑」、花瓶に生けられた花のなつかしい暖かさ、といった優しく心地よい要素に満ちた場所である。そのなつかしい場所にいるべきであったのに、出仕を求め、さらに今度は南の齊安（黃州）に赴こうとしている、と詩は續けられる。故郷に居るべきであったのに出仕を求めたのは誤りであった、という考え方は既に擧げた作品にも見られたものだが、ここでは蘇軾は、流謫の身で故郷に歸れないからではあるが、黃州を自分の歸田の場所として買田しようとしている。このように黃州流謫中の彼が、故郷への歸還の夢と黃州での定住を餘儀なくされる現實の間で揺れていたことは、「游淨居寺」詩（合註卷二十）の末尾の「回首吾家山、歲晚將焉歸。（回首す吾が家山、歲晚將た焉んぞ歸せん。）」、「次韻前篇（定惠院寓居月夜偶出）」詩（合註卷二十）の「至今歸計負雲山、未免孤衾眠客舍。（今に至るも歸計雲山に

負く、未だ免れず孤衾客舎に眠るを。」等の故郷への歸田を願う表現を繰り返すことから窺えよう。

さて、そのような現實と夢との間の葛藤を靜めるために、蘇軾はある一つの手段を用いている。つまりそれは蜀に關わるものを黃州での生活に見出し、また持ち込むことである。例えば尺牘「與范子豐八首」其八（東坡先生全集卷五十分文盛堂刊本以下同）は次のように述べている。

臨臯亭下不數十步、便是大江。其半是峨眉雪水、吾飲食沐浴皆取焉。何必歸鄉哉、江山風月本無常主、閒者便是主人。

臨臯亭の下十歩を數へずして、便ち是れ大江なり。其の半はは是れ峨眉の雪水、吾れ飲食沐浴皆な焉に取れり。何ぞ必らず歸郷せんや、江山風月本と常主無し、

閑なる者便ち是れ主人たり。

蘇軾は既に密州でも、峨嵋山に似た山を小峨嵋と呼んで愛でることがあったが、黃州ではその傾向はさらにエスカレートしている。ここでは家のすぐ脇を流れる長江が遙か峨嵋山から來たものであることが、流謫地にある蘇軾

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

に常に故郷を感じさせ、安心を與えるものとなっている。さらに言えば、蘇軾が故郷を感じるよすがとするのは、水のみではない。彼はまた黃州東坡に營んだ農地に蜀名産の野菜である「元修菜」を取り寄せようとしており、「元修菜」詩の跋（合註卷二十二）にはその經緯を次のように記している。

菜之美者、有吾鄉之巢。故人巢元修嗜之、余亦嗜之。

元修云、使孔北海見、當復云吾家菜耶。因謂之元修菜。余去鄉十有五年、思而不可得。元修適自蜀來、見余於黃。乃作是詩、使歸致其子、而種之東坡之下云。

菜の美き者、吾の郷の巢有り。故人巢元修之を嗜み、余も亦た之を嗜む。元修云へらく、孔北海をして見せしむれば、當に復た吾が家の菜と云ふべきかと。因りて之を元修菜と謂ふ。余郷を去りて十有五年、思へども得べからず。元修適たま蜀より來たり、余に黃に見ゆ。乃ち是の詩を作り、歸りて其の子を致さしめて、之を東坡の下に種えんと云ふ。

蘇軾にとっての元修菜は、故郷の友人との思い出に繋が

る特別な懐かしい野菜であり、これを植えかつ食べることは、彼に故郷との繋がりを確認させる行爲と言えよう。また「戯作種松」詩^③（合註卷二十）では、少年時代に蜀でしたように黃州でも松を植えて、五百年も経って松が立派に育ったら、鶴に乗って故郷へ歸るのだとも述べ、ここでは松を植える行爲が、少年時代の蜀での生活と連續性を持つものと感じられ、彼に安らぎを與えている。

このように黃州での蘇軾は蜀から來たつたものを身近に置くことで故郷との繋がりを確認し、心を慰めていたと思われるが、さらにその對象として海棠の花をも擧げることができる。「寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也」（合註卷二十）詩を見てみよう。

江城地瘴蕃草木	江城	地は瘴にして草木を蕃らし
只有名花苦幽獨	只だ名花有りて幽獨に苦しむ	
嫣然一笑竹籬間	嫣然として一笑す竹籬の間	
桃李漫山總麤俗	桃李は山に漫たるも總じて麤俗	
也知造物有深意	也た知る造物の深意有りて	
故遣佳人在空谷	故らに佳人をして空谷に在らしむ	

を

自然富貴出天姿 自然の富貴は天姿に出で

不待金盤薦華屋 金盤の華屋に薦むるを待たず

朱唇得酒暈生臉 朱唇 酒を得て 暈 臉に生じ

翠袖卷紗紅映肉 翠袖 紗を卷きて 紅 肉に映ず

林深霧暗曉光遲 林深く 霧暗くして 曉光遅し

日暖風輕春睡足 日暖かく 風輕くして 春睡足れ

り

雨中有淚亦悽愴 雨中に涙有るも亦た悽愴

月下無人更清淑 月下に人無くして更に清淑

まず前半部分である。造物主の深い意圖によって瘴氣立つ異境の鬱蒼とした山中に置かれ、孤獨を強いられる蜀から來た佳人たる海棠の花は、言うまでもなく蘇軾に共感を感じさせる對象である。蘇軾はこの花を見に何度も足を運んだらしく、詩には霧の朝、穩やかな日中、雨降り、月夜という様々な時間、天候にみせる様々な美しさが列擧される。

さて、續く後半は詩の作者と海棠の關わりを具體的に述

べている。

先生食飽無一事

散步逍遙自捫腹

不問人家與僧舍

拄杖敲門看修竹

忽逢絕艷照衰朽

歎息無言揩病目

陋邦何處得此花

無乃好事移西蜀

寸根千里不易致

銜子飛來定鴻鵠

天涯流落俱可念

爲飲一樽歌此曲

明朝酒醒還獨來

雪落紛紛那忍觸

先生 食ひ飽きて一事無し

散步 逍遙 自ら腹を捫づ

人家と僧舍とを問はず

拄杖 門を敲きて修竹を看る

忽ち絶艷の衰朽を照らすに逢ひて

歎息して 言無く 病目を揩す

陋邦 何れの處にか此花を得たる

乃ち好事の西蜀より移せる無からんや

寸根 千里 致すこと易からず

子を銜みて飛び來たれるは定めて

鴻鵠ならん

天涯に流落し俱に念ふべし

爲に一樽を飲みて此の曲を歌はん

明朝 酒醒めて還た獨り來らば

雪のごとくに落ち紛紛として那んぞ觸るるに忍びん

鬱々たる蘇軾は、心を靜めるものを求めて竹を見に來たのであろう。しかし彼はそこで、思いがけず海棠の花盛りに出會った。竹は傳統的にも、また蘇軾の他の作品においても、文同の畫竹に對する評に顯著なように、閑居における徳の修養の象徴であるが、それとは反對に、海棠は蘇軾個人にとってノスタルジーを掻き立てる對象であり、彼を

甘く優しい感傷のなかで慰めてくれるものである。しかしこの詩の最後の二句に示されるように、彼は眼前に現れた故郷の幻想にいつまでも浸ることはできない。なぜなら彼にはそれがひとときのものに過ぎず、明日になれば酒から醒めた自分には流謫者の現實が押し寄せ、この海棠も散り、幻影が消えてしまうことを予感しているからだ。

この詩の末尾では海棠の落花が予想され、それが美しい故郷の幻想のはかなさを象徴しているが、同様の海棠の落花は二年後の「寒食雨二首」(合註卷二十一) 其一にも描かれてゐる。次にこれを見てみよう。

自我來黃州 我 黃州に來りしより

已過三寒食 已に三たびの寒食を過ごせり

年年欲惜春 年年 春を惜しまんと欲すれども

春去不容惜 春は去りて惜しむを容れず

今年又苦雨 今年 又た雨に苦しみ

兩月秋蕭瑟 兩月 秋のごとく蕭瑟たり

臥聞海棠花 臥して聞く 海棠の花の

泥汙燕脂雪 泥に燕脂の雪を汙さるるを

暗中偷負去 暗中 偷かに負ひて去る

夜半眞有力 夜半 眞に力有り

何殊病少年 何ぞ殊ならんや 病める少年の

病起頭已白 病より起てば 頭 已に白きに

この詩での蘇軾は消沈し、無力感に満ちている。惜しんでも毎年春はさつさと去っていつてしまひ、(ここでの春の擬人的表現にはいくらかいつもの彼らしい戯れがあるのだろうが。)今年はその上まるで秋のようにしとしとと雨が降り續く。力無く横になっていると、海棠の花が泥の中に燕脂色の雪のように散ったという。春はかくも早く過ぎ去り、失われていく。前に舉げた詩では、海棠の落花は故郷への幻想の崩壊を象徴し、最終句で彼は散り敷いた花瓣に觸れる

には忍びないと述べていたが、それに比してこの詩の海棠の落花の描寫はさらに強烈である。ここでは「燕脂」という語で海棠の花の濃い赤色が視覺的に示され、さらにそれは「雪」にたとえられることで、そのひとひらひとひらの小ささ、輕さと、散り落ちる量の多さを強くイメージさせる。しかし、ここではそれが散っていく先として、華やかな赤い花びらとはおよそ對照的な無彩色の泥濘が示されている。紅色の雪のように降りしきる花びらが、薄黒い泥の中に消えてゆく光景は、何と凄慘なものだろうか。

さらにこの詩での海棠の落花の情景は、實際に目の當たりにされたものではなく、家の中で物憂く横になっている蘇軾の頭の中で想像されたものであることにも注意したい。そうであるからこそ、この情景はなおさら彼の心境を反映する象徴性に富むものといえよう。つまりこれは彼の望郷の念の絶望の具象化なのである。

次にこの連作の其二を見てみよう。

春江欲入戸 春江は戸に入らんと欲し

雨勢來不已 雨勢は來たりて已まず

小屋如漁舟

小屋は漁舟の如く

濛濛水雲裏

濛濛たり水雲の裏

空庖煮寒菜

空庖に寒菜を煮

破竈燒濕葦

破竈に濕葦を燒く

那知是寒食

那んぞ知らん 是れ寒食なるを

但感烏銜紙

但だ烏の紙を銜むを感じるのみ

君門深九重

君門は深きこと九重

墳墓在萬里

墳墓は萬里に在り

也擬哭途窮

また途の窮するに哭せんと擬す

死灰吹不起

死灰は吹けども起たず

この其二にも前首の暗澹たる氣分は繼承され、ますます消沈していく。増水した長江から立ち昇る靄に包まれた小さな臨江亭は、世の中から隔てられた場所である。今日が寒食であることも、烏が紙錢をくわえているのを見てやっと思ひ出す始末なのだ。「九重」は王宮を指す言葉だが、ここでは同時に、自分から見た朝廷がこの深い靄の彼方に幾重にも閉ざされている、という疎外感をも表しているだろう。また、ここでは墳墓の地たる故郷も遙か萬里の彼方に

蘇軾の歸田と賈田（湯淺）

隔てられたものと感じられている。現在の作者の居場所はこの孤立した流謫地の見通しのきかない靄の中にしかない。蘇軾は生涯を通して、如何なる状況にあっても、自身の精神を安定させ切り抜けようとするが、この二首での彼は異様に暗い。ここには官界からも故郷からも隔てられた黃州の靄の中の蘇軾の、物憂く靜かな絶望がある。

さて、この海棠の落花を詠み入れた二詩はそれぞれ元豐三年とその翌年同時期の作であり、その間の蘇軾の歸田を巡る心境がますます暗くなっていることを窺わせるが、さらに、この二詩には含まれた元豐四年に、黃州東坡での耕作の次第を述べる「東坡八首」（合註卷二十一）の連作が作られていることにも注意しておきたい。

長い連作なのでここでは全文を引くことは避け、その概要のみをまとめるに止めるが、まず其一で「獨有孤旅人、天窮無所逃。端來拾瓦礫、歲旱土不膏。（獨り孤旅の人有り、天窮せしめて逃るる所無し。端に來りて瓦礫を拾ふも、歲旱にして土は膏ならず。）」と、苦難のなかにある孤獨な流罪人として自己を描いているのに對して、其二以降では、空き地の

手配から、整地、耕作に際して、地質や良き友人、様々な幸運といった外的な要因に恵まれたことを述べている。特に其七は、黃州で知り合った友人たちに言及し、恵まれな境遇にある彼らが、東坡の農地に自分をねぎらいに來てくれることを喜び、さらに詩の末尾では「可憐杜拾遺、事與朱阮論。我師卜子夏、四海皆弟昆。（憐れむべし杜拾遺、事朱阮と論ず。我 卜子夏を師とせん、四海皆な弟昆なり。）」

と、杜甫が朱老・阮生の二人と交際したのみであつたのを超えて、自分はこの三人のみならず天下のすべての人と兄弟になろうという、自己をより廣い社會的なつながりのなかに置こうとする、前向きな意志が表現されている。この「東坡八首」詩の、耕作のなかで社會とのつながりを回復していかうとする意志と、その前後の時期に制作された「寒食雨二首」の五里霧中の絶望感とは實に對照的であり、そこからは當時の彼の葛藤の深さが窺われる。この「東坡八首」詩の構成からも明らかのように、黃州東坡での耕作が彼に一種のカタルシスとして作用したことは確かだが、そこで得られるのは流謫者としての彼が持ち得る、黃州で

の周圍の人々とのつつましい繋がりと、ささやかな社會化の喜びであり、それは政治の世界から疎外された孤立を昇華するものにすぎない。蘇軾は黃州東坡での穩やかな農耕のなかに、本當に自足しきることはできなかったのではないだろうか。

さて、先に見た「寒食雨二首」の末尾で「死灰は吹けども起たず」と消沈していた蘇軾は、これ以後黃州期の詩のなかで故郷への歸田の希望を述べることはない。元豐四年に黃州から蘇軾が文彥博に送った「黃州上文潞公書」（東坡集卷二十九）は、流謫地での生活について「黃州食物賤、風土稍可安。既未得去、去亦無所歸、必老於此。（黃州は食物賤く、風土稍や安んずべし。既に未だ去るを得ず、去りても亦た歸る所無し、必らず此に老いん。）」と、自らを歸るべき故郷を持たぬ者として、黃州で生涯を終える覺悟を述べているし、また「初秋寄子由」詩（合註卷二十二）では、弟の子由（轍）に次のようにも語っている。

買田秋已議 買田 秋 已に議せり

築室春當成 築室 春 當に成るべし

雪堂風雨夜 雪堂 風雨の夜

已作對牀聲 已に作す對牀の聲

唐・韋應物「示全眞元常」詩（韋蘇州集卷三）の「寧知風雪夜、復此對牀眠。（寧んぞ知らん風雪の夜、復た此に床を對して眠らんとは。）」を典據とする「夜雨對牀」は、鳳翔期から既に子由との蜀への歸田の夢を表すものとしてたびたび登場しているが、ここでははつきりと黃州東坡の農地とそこに建てられた雪堂を、子由と共に「買田」「築室」する場としている。

また子由が筠州教授を罷免されたことを聞いての作「聞子由爲郡僚所掊、恐當去官」（合註卷二十二）には、「時哉歸去來、共抱東坡耒。（時なるかな歸りなんいざ、共に東坡の耒を抱かん。）」と、ここを陶淵明的な歸田の場とも表現している。王文誥『蘇文忠公詩編註集成總案』卷二十一の編年考證によれば、東坡の農地を手に入れてからの蘇軾は、陶淵明の「歸去來辭」をもとにした詩・詞を制作したり、「歸去來辭」中の言葉を書き付ける等の行動を繰り返しており、後の一連の和陶詩との関わりを窺わせるのみならず、他か

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

ら餘儀なくされたものであるこの黃州居住を、故郷の代償としての歸田の場として捉え、東坡での耕作に、陶淵明的な田園生活の安らぎを求めようとしていることが窺われる。

三 買 田

さて、しかし黃州東坡の農地は、蘇軾の苦しい生活を助けるために周囲の者が手配して空き地を用立てたのであって、蘇軾自身が進んで購入し、自己の所有としたものではない。またこの黃州期に彼は、友人から長江對岸の武昌（現湖北省鄂城市）での買田を勧められたりもしているが、實現はしていない。この黃州期も含んだ蘇軾の買田の状況については、既に早く竺沙雅章氏が「北宋士大夫の徙居と買田——主に東坡尺牘を資料として——」（史林第54巻第2號 一九七二）で詳しく考察されている。

そこで竺沙氏は王文誥『蘇文忠公詩編註集成』卷二十四の記述を踏まえて、「蘇軾が買田の計畫をいだいたのは科擧に及第したときにはじまると言われるが、それを實行に移したのは黃州謫居の時期であった。」と述べておられる

が、知徐州期の「次韻和劉貢父登黃樓見寄並寄子由二首」詩（合註卷十九）其一の、「會合難前定、歸休試後圖。腴田未可買、窮鬼却須呼。（會合前定し難し、歸休後圖を試みん。腴田未だ買ふべからず、窮鬼却つて須らく呼ぶべし）」という部分の、「腴田未可買」の後に付された自注で、「本欲買田於泗上、近已不遂矣。（本と泗上に買田せんと欲するも、近ごろ已にして遂げず。）」と述べているので、既に知徐州期にも蘇軾はこの地での買田を考えたことがあったことが窺われる。

さらに、この徐州での買田の計畫は、また「靈壁張氏園亭記」（東坡集卷三十二）でも、靈壁（現安徽省靈璧縣）の張氏庭園の立地の説明と併せて觸れられている。

今張氏之先君、所以爲其子孫之計慮者遠且周、是故築室藝園於汴・泗之間、舟車冠蓋之衝、凡朝夕之奉、燕遊之樂、不求而足。使其子孫開門而出仕、則跼步市朝之上、閉門而歸隱、則俯仰山林之下。於以養生治性、行義求志、無適而不可。故其子孫仕者皆有循吏良能之稱、處者皆有節士廉退之行。蓋其先君子之澤也。余爲彭城二年、樂其土風。將去不忍、而彭城之父老亦莫余

厭也、將買田於泗水之上而老焉。南望靈壁、雞犬之聲相聞、幅巾杖屨、歲時往來於張氏之園、以與其子孫遊、將必有日矣。元豐二年三月二十七日記。

今張氏の先君、其の子孫の爲に計慮する所以の者は遠く且つ周し、是の故に築室藝園すること汴・泗の間、舟車冠蓋の衝に於いてし、凡そ朝夕の奉、燕遊の樂、求めずして足れり。もし其の子孫をして開門して出仕せしめば、則ち市朝の上に跼歩し、閉門して歸隱せしめば、則ち山林の下に俯仰す。於に以て生を養ひて性を治め、義を行ひて志を求め、適きて可ならざる無し。故に其の子孫の仕ふる者は皆な循吏良能の稱有り、處る者は皆な節士廉退の行有り。蓋し其の先君子の澤ならん。余は彭城と爲りて二年、其の土風を樂しめり。將に去らんとして忍びず、而して彭城の父老も亦た余を厭ふ莫きなり、將に田を泗水の上に買ひて老いんとす。南のかた靈壁を望めば、雞犬の聲相ひ聞こえ、幅巾杖屨、歲時張氏の園に往來し、以て其の子孫と遊ぶ、將に必らず日有らん。元豐二年三月二十七日記。

ここでの靈壁の張氏園庭の立地に關する説明によると、首都汴京に直通する交通の幹線である汴河下流の靈壁は、出仕するにも隱居するにも至便の地であり、買田の場所として最適だということである。ここからは、蘇軾のみならぬ當時の士大夫が理想とする買田の地は、社會から隔絶された隱居場所ではなく、自分及び子孫が「仕」の生活と「隱」の生活のそれぞれを満足させることのできる場であることが窺われるだろう。中唐の白居易の「吏隱」「中隱」は、官吏の「仕」の生活の中に「隱」の要素と氣分を持ち込み、兩者の調和、融合をめざすものであったが、北宋の士大夫たちはそれを繼承しつつも、「仕」という公的世界に生きる生き方と、「隱」という私的な満足を追求する生き方とのそれぞれにおいて、より満足を得ようとしているのである。

また、この「靈壁張氏園亭記」前半の園内の豪華な美しさを記した部分に、「其深可以隱、其富可以養。果蔬可以飽鄰里、魚鼈筍茹可以餽四方之賓客。（其の深きは以て隱るべく、其の富めるは以て養ふべし。果蔬は以て鄰里を飽かさべく、

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

魚鼈筍茹は以て四方の賓客に饒るべし。）」と述べられているように、買田の地には何よりも、交通の便と合わせて、自己及び子孫の生活を安定させるに足る經濟的な豊かさが求められたと思われる。多くの士大夫たちが買田を行った河南、荊湖、江南の諸地は豊かな穀倉地帯であった。

さて、結局徐州でも黃州でも買田を實行しなかった蘇軾は、黃州流滴を解かれた後、買田の土地を探し、結局、幹線運河で首都に通じる常州（現江蘇省常州市）に買田を實行している。竺沙氏の論文でも取り上げられていた王文誥『蘇文忠公詩編註集成』卷二十四は、この常州買田を科擧及第以來の計畫であったとしているが、これ以前の蘇軾の詩文でこの計畫に言及するものではなく、確實にそうだとは言いつけないのではないだろうか。また、經濟的にも困窮し生活の資を必要としていた黃州で、蘇軾が友人たちの勧めにも関わらず買田しなかったのは、長江中流の黃州が地理的に首都に出るのに不便であること、豊かな土地ではないことと、さらにいくらかでも、流滴を解かれる可能性を考えていたからではないだろうか。

さて、蘇軾が常州での買田を友人たちに傳える書簡がいくつか残されている。その中で「與潘彥明十首」其一（東坡先生全集卷五十三）（潘彥明は傳未詳。）には「已買得宜興一小莊、且乞居彼、遂爲常人矣。（已に宜興の一小莊を買ひ得たり、且く彼に居するを乞ひ、遂に常の人と爲らん。）」と、ここを自分の終の棲家とする意志が表され、また「與賈耘老四首」其二（同卷五十七）（賈耘老是賈收。烏程人。『宋詩紀事』卷三十有傳。）の「僕當閉戸不出、公當扁舟過我也。（僕は當に戸を閉じて出でざるべし、公は當に扁舟にて我に過ぐべきなり。）」（與滕達道六十八首」其三十二（同卷五十一）にも殆ど同じ表現が見える。）には、世間から完全に引退して引きこもってしまおうとする態度を見ることができ、これらを見る限り、買田當初の蘇軾は餘生をここで過ごすことを覺悟していたと思われる。

また買田を達成した感慨は「歸宜興、留題竹西寺三首」（台註卷二十五）にもうたわれている。次にこれを見てみよう。
 十年歸夢寄西風 十年 歸夢 西風に寄す
 此去眞爲田舍翁 此のたび去りて眞に田舎の翁と爲

らんとす

剩覓蜀岡新井水 剩へ蜀岡新井の水を覓めて
 要攜鄉味過江東 鄉味を攜して江東を過ぐるを要す
 まず其一である。西に向かう風に寄せていた蜀への歸田の望みは、常州を自分のついのすみかと決めたことによつて、現實的に斷ち切られてしまふが、ここでも蘇軾はまだ蜀とのつながりを求めている。「蜀岡新井」は王十朋注の引く趙次公注によれば、竹西寺の井戸水で、蜀江の如き味であつたといい、蘇軾は黃州の謫居で長江の水に故郷との繋がり求めたのと全く同じように、常州の井戸水に故郷との繋がり求めている。つまり常州の土地は蘇軾にとつてはやはり故郷の代わりでしかなく、依然として蘇軾の意識においては蜀が優先されているのである。

では連作の後の二首を見てみよう。

道人勸飲雞蘇水 道人は雞蘇の水を飲むを勧め
 童子能煎鴛粟湯 童子は能く鴛粟の湯を煎る
 暫借藤牀與瓦枕 暫く藤牀と瓦枕とを借りて
 莫教辜負竹風涼 竹風の涼しきに辜負せしむること

莫かれ

(其二)

此生已覺都無事

此の生 已に覺ゆ 都て事無しと

今歲仍逢大有年

今歲 仍ほ大有の年に逢ふ

山寺歸來聞好語

山寺 歸り來りて 好語を聞く

野花啼鳥亦欣然

野花 啼鳥も 亦た欣然たり

(其三)

前首で言及された蜀江の味のする水で點てたお茶を飲んで初めてくつろいだ気分になり(其二)、くぐり抜けてきた人生の波瀾も、遂に手に入れた歸田の場の穩やかで豊かな風景の中では、無かったかのように思われる(其三)、と蘇軾は述べ、常州の土地が理想的な歸田の地であることを喜びかつ願っている。

ところが、その後再び官界に出た蘇軾はこの常州の土地について、「我田荆溪上、伏臘亦蠶供。」(「送路都曹」詩(合註卷三十四))等と言及することがあるくらいで、觸れることはむしろ少なく、黃州期以前に蜀への郷愁が繰り返し表現されたとは異なっている。つまるところ、常州は現實

蘇軾の歸田と買田(湯漢)

的な生活を維持するための場に過ぎず、かつ手に入れて

間もなく、その土地に關する記憶も少ないので、詩文での言及が少なくなるのだろうか。また常州での買田に際して、地方官と結託して不正を行った疑いをかけられたことも、彼の常州に對する心證を悪くさせたのかもしれない。

また、常州への言及が少ない傾向は晩年の嶺南流謫中も變わることがなく、例えば海南島で制作した「和陶貧士七首」其七(合註卷三十九)では次のように述べている。

我家六兒子

我家の六兒子

流落三四州

流落して三四州にあり

辛苦見不識

辛苦 更に識らず

今與農圃儔

今は農圃と儔とならん

買田帶修竹

田を買ひて 修竹を帶し

築室依清流

室を築きて 清流に依る

未能遣一力

未だ能く一力を遣して

分汝薪水憂

汝の薪水の憂ひを分かつあたはず

坐念北歸日

坐るに念ふ 北歸の日

此勞未易酬

此の勞 未だ酬ふこと易からん

我獨遺以安 我 獨り遺るに安を以てす

鹿門有前修 鹿門 前修有り

ここでは常州の買田した土地で耕作している息子達の苦勞に、いつか報いてやりたいと思う心情を述べるのみで、常州は決して自分に安寧を約束する場所とは思はれていない。同じく「寄高令」詩（合註卷四十）でも、「田園知有兒孫委、早晚扁舟到海涯。（田園兒孫に委す有るを知り、早晚扁舟海涯に到らん。）」と子供達に任せてある常州の田園を自分の歸る先とするばかりで、そこでの幸福な生活は予想されていいない。常州には蜀を思わせる水があるのみで、他には彼の心を強く動かすものがなかったのだろうか。

また、蘇軾の買田が黃州流謫を許されたとはいえ、不運な時期に、いくらかやむを得ない状況の下で行われたものであることも、常州に對する感情に影を落としているだろう。また、故郷への思いの強さという點から言えば、生まれてから科擧受験までを蜀に暮らした彼にとって、蜀は父祖の地であり、かつ生まれ育った場所でもあり、「戲作種松」詩などから窺われるように、そこには彼個人の經驗に

關わる思い出も數多くあるに違いない。このように蜀が彼自身と強く結びついた大切な場所であることが、流謫地の黃州でも買田先の常州でも見られた、それらの土地に蜀に繋がるものを探し求めようとする姿勢の原因であろう。つまり蜀はまだ彼のアイデンティティーの重要な一部分であり、日々の生活のなかで自分がどんなに様々な土地を轉々としようと、遠くにある蜀は變わらない場所、不動の一點として存在し、そこに繋がりを感じるものが、彼に安心をもたらししているのである。だからこそ、黃州で故郷からの斷絶を感じた時の蘇軾の詩は、あんなにも悲しんでいるのだ。

さらに、後でも觸れるように、士大夫の個の官僚としての意識の強まりが、彼らの吏隱や買田における充足を可能にしていると考えらるならば、それらに満足できずに故郷のイメージを搜し続ける蘇軾の態度は、蜀の蘇氏という一族に屬することが、依然として彼のアイデンティティーの重要な一部分を占めているということを示すものではないか、とも考えられる。しかし、これまでに見てきた蘇軾の故郷

への歸田に關わる表現には、そのような氏族としての蘇氏に關わるものは見えず、そのかわりに水や植物といった自然物への言及が散見することから、彼が自分の故郷と感じているのは、彼の屬する一族ではなく、自分が直接觸れた風土であることが窺われる。

また蘇軾は歸田、買田をともにしたい相手として弟の子由を屢々擧げているが、弟は氏族よりもより細分化された集團である家族の一員であり、蜀での思い出も、官としての經驗や價值觀も共有できる中間項的な性格を持つ存在である。

つまり、蘇軾は買田を行ってはいるが、その心中では故郷はまだ自分から完全に切り離されてはおらず、その風土や家族が、自己に安らぎをもたらすものとして期待されており、故郷から切り離された個としてのあり方が成立しつつある當時の状況を反映するものと言えよう。

では、次に蘇軾の買田の地に對するこのような態度についてさらに廣い視野から考察するために、當時の他の人々の状況を概観してみよう。まず、買田した場所に對して蘇

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

軾と對照的な態度であつた人物の例としては、蘇軾の師匠格に當たる歐陽修（一〇〇七—一〇七二）が擧げられるだろう。歐陽修の本籍地は吉州（現江西省吉安市）であるが、彼は潁州（現安徽省阜陽市）に買田致仕し、その經緯を「思穎詩後序」（居士集卷四十四 四部叢刊初集所收、以下同）に次のように記している。

皇祐元年春、予自廣陵得請來穎。愛其民淳訟簡而物產美、土厚水甘而風氣和、於時慨然已有終焉之意也。爾來俯仰二十年間、歷事三朝、竊位二府、寵榮已至而憂患隨之。心志索然而筋骸憊矣。其思穎之念、未嘗少忘于心。而意之所存、亦時時見於文字也。

皇祐元年春、予は廣陵より潁に來たるを請ふを得たり。其の民淳く訟簡にして物產美く、土厚く水甘くして風氣和せるを愛で、時において慨然として已に終焉の意有るなり。爾來俯仰二十年間、三朝に歷事し、位を二府に竊み、寵榮已に至りて憂患之に隨ふ。心志索然として筋骸憊る。其の思穎の念、未だ嘗て少しも心に忘れず。而して意の存する所は、亦た時時に文字に見る

なり。

歐陽修が潁州に買田したのは、知州として赴き、その風土が氣に入つたからである。彼は梅堯臣とこの地での買田を約束し「續思潁詩序」(居士集卷四十四)に経緯を記す。潁州への歸田を心待ちにする思いをいくつもの詩にうたい、それらを編集したりもしていた。その後彼が希望どおりに潁州に致仕し、六一居士として閑居を楽しみつつ間もなく生涯を終えたのは周知のことであろう。つまり高官として順調な時期にあつた歐陽修にとって、自らが選んだ土地での買田は心待ちにされるものであり、潁州は特別な約束の土地なのだ。

ところで、南宋の洪邁は『容齋續筆』卷十六(四部叢刊續編所收本)「思潁詩」の條で、北宋の士大夫が歸郷せずに買田徙居する風潮を批判し、その冒頭で次のように述べている。

士大夫發跡壠畝、貴爲公卿、謂父祖舊廬爲不可居、而更新其宅者多矣。復以醫藥弗便、飲膳難得、自村疇而遷於邑、自邑而遷於郡者亦多矣。唯翩然委而去之、或遠在數百千里之外、自非有不得已、則舉動爲不宜輕。

若夫以爲得計、又從而詠歌夸詡之、著于詩文、是其一時思慮、誠爲不審、雖名公鉅人、未能或之免也。

士大夫の跡を壠畝より發し、貴くして公卿と爲り、謂ひて父祖の舊廬は居るべからずと爲し、而して其の宅を更新する者多し。復た醫藥の便ならず、飲膳の得難きを以て、村疇よりして邑に遷り、邑よりして郡に遷れる者亦た多し。唯だ翩然と委ねて之を去り、或ひは遠く數百千里の外に在りて、大いに已むを得ること有るに非ざる自り^よは、則ち舉動は宜しく輕からざるべき爲り。若し夫れ以て計を得たりと爲さば、又た從ひて之を詠歌夸詡し、詩文に著すは、是れ其の一時の思慮にして、誠に不審爲り、名公鉅人と雖も、未だ能く之を免るる或^あらざるなり。

洪邁は、立身出世した士大夫がもはや故郷に歸らない風潮を批判し、なおさらそれを詩文に表すのは以ての外であるとして、先に見た歐陽修の「思潁詩」を初めとする作品を擧げて「嗟乎、此文不作可也。(嗟乎、此の文作らざる可なり。)」と批判している。さらにこの條の末尾では蘇軾・蘇

轍を批判している^⑦ので、洪邁が彼ら三人を徙居者の典型と見なしていたことは明らかである。

ではさらに、歐陽修と蘇軾を含んだ北宋中期の士大夫の買田徙居の状況について、もう少し廣く見ておきたい。徙居は文字通りには住まいを移すことだが、これはしばしば墳墓の移動が伴っている。先祖代々の傳統的繼承を重視する當時の中國の氏族においては、墳墓の移動は本籍地の變更を意味する大きな事件といえよう。眉州出身の蘇軾・轍兄弟はともに汝州（現河南省鄭縣）に、吉州出身の歐陽修は開封府新鄭縣（現河南省新鄭縣）に、それぞれ葬られたが、それらの土地は彼らにとって、故郷でも買田の地でもない。しかし北宋期の士大夫のすべてが異郷に葬られたわけではなく、没後、故郷に葬られた例としては、曾鞏（建昌郡南豐 一〇一九～一〇八三）・尹洙（河南 一〇〇一～一〇四七）、また軾・轍の父である蘇洵（眉州眉山縣）ら他多數を擧げることができる。また司馬光（一〇一九～一〇八六）の場合には致仕後は故郷（陝西夏縣涑水郷）以外の土地（洛陽）に閑居したが、故郷に葬られているし、さらに泉州同安の出身の蘇

頌（一〇二〇～一一〇二）は父を潤州丹陽に葬って徙居し、自らもその地に葬られた。このように基本的には故郷へ葬るという傳統が優先されるが、傳統の拘束は必ずしも絶對ではなく、別の場所に葬られることもまた可能であったと思われる。

さらに當時の詩大夫の徙居の意識を知ることのできる例として、司馬光『溫公續詩話』（歷代詩話所收本）に記された、成都華陽の人である范鎮（一〇〇八～一〇八九）の行動を見てみよう。

范景仁鎮喜爲詩、年六十三致仕。一朝思鄉里、遂徑行入蜀。故人李才元大臨知梓州、景仁枉道過之。歸至成都、日與鄉人樂飲、散財于親舊之貧者、遂遊褒眉青城山、下巫峽、出荊門、凡朞歲乃還京師。

范景仁 鎮 詩を爲るを喜び、年六十三にして致仕す。一朝 鄉里を思ひ、遂に徑行して蜀に入る。故人李才元大臨梓州に知たり、景仁は道を枉げて之に過ぐ。歸りて成都に至り、日び郷人と樂飲し、親舊の貧者に散財し、遂に褒眉青城山に遊び、巫峽を下り、荊門に出

で、凡そ暮歳にして乃ち京師に還る。

范鎮は致仕の後、蜀へ旅に出た。近くに在任している友人を訪ね、郷里の成都では人々と酒を酌み交わし、貧しい親戚・知人に金品を與え、さらに蜀の象徴とも言える峨嵋・青城山に登り、一年ほどで都へ歸ってきたという。范鎮の行動は郷愁に誘われたものなのだろうが、一方では故郷に錦を飾る行爲ともとれるし、また文中には書かれていないが、先祖の墓參の意味もあったと思われる。

宋代には、忌避の制度により故郷に赴任することはできなかったため、各地を移轉し續ける生活を送る士大夫たちが故郷に歸ることは容易ではなかった^⑧。この范鎮のように致仕後に旅をするのは、故郷へ歸るための一つの方法であつただろう。しかしここで注意したいのは、范鎮が故郷に止まらなかつたということである。彼は許州に徙居し、汝州に葬られており、故郷を自分の歸居すべき所とは考えていなかった。

これらの状況から考えるに、北宋期の士大夫、それもかなり榮達した人々に多く見られる徙居の風潮は、彼らの意

識の變化に根ざすものと言えよう。つまり、門閥によらず、科擧試験を受験することによって一人一人登用された彼らにとつては、頼りになるのは自分の實力と官界での人脈であり、故郷の親類縁者は懐かしさこそあれ、もはやそこに自分のアイデンティティーを感じる對象とはなりにくくなっているのではないだろうか。徙居者の典型とされる歐陽修のように、父觀の任地であつた綿州で生まれ、本籍地の吉州には父母の葬儀の時に歸つただけと思われる人物にとつては、吉州は父祖の地ではあつても、自分自身に關わる思い出をほとんど持たない場所である。そのような人が、買田徙居によって自分自身がくつろぐことのできる、個人的な固定した場所を持つとすることは自然な衝動であらう。つまり、買田徙居が成り立つには、門閥や血族に對してのアイデンティティーよりも、より個人的な自分が強く意識される状況があらねばならないだろう。范仲淹（九八九—一〇五二）が蘇州に一族の生活を支える互助組織である范氏義莊を設立したことは有名だが、彼自身はそこへ行つて住むことをしなかつたのは、一族に配慮しながらも、自

分との間に一線を畫す姿勢の現れであらうし、また歐陽修と梅堯臣のように、親しい友人同士が一緒に買田徙居することを約束する例がしばしば見え、舊來の地縁、血縁關係よりも、同じ價值觀を共有する友人關係に據り所が求められるのも、このような意識の變化と關わるものであると言えよう。このような狀況のもとで、士大夫たちは河南、荊湖の地方へ、また洛陽へと、自分及び子孫にとってより快適な場所を求めて行つたのである。

そしてこのような買田徙居は、蘇軾の親子においても二代にわたって夢見られ、實行されている。まず、父蘇洵は詩（嘉祐集箋註卷十六所收 上海古籍出版社 中國古典文學叢書本）の題として、

丙申歲、余在京師。鄉人陳景回自南來、棄其官得太子中允。景回舊有地在蔡、今將治園囿於其間以自老。余嘗有意於嵩山之下洛水之上買地築室、以爲休息之館、而未果。今景回欲余詩、遂道此意。景回志余言、異日可以知余之非戲云爾。

丙申の歲、余は京師に在り。鄉人陳景回南より來たり、

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

其の官を棄て太子中允を得。景回舊と地の蔡に在る有り、今將に園囿を其の間に治め以て自ら老いんとす。

余嘗て嵩山の下洛水の上に地を買ひ室を築きて、以て休息の館と爲さんとの意有るも、未だ果たさず。今景回の余が詩を欲するに、遂に此の意を道ふ。景回余が言を志せ、異日余の戯れに云ふに非ざるを知るべきのみ。

と、買田築室の希望を述べている。父蘇洵のこの希望は結局實現せず、彼は開封で没し、蜀に葬られたのだが、弟の蘇轍（子忠）は後に許州（現河南省許昌市）に買田し、その經緯を「和遲田舎雜詩九首」引（欒城後集卷四 上海古籍出版社 中國古典文學叢書本）に次のように記している。

吾家本眉山、田廬之多寡、與揚子雲等。仕宦流落、不復能歸。中竄嶺南、諸子不能盡從、留之潁川、買田築室、賒饑寒之患。旣蒙恩北還、因而居焉。

吾が家は本眉山、田廬の多寡は、揚子雲と等し。仕宦流落し、復た歸る能はず。中ごろ嶺南に竄せらるるに、諸子盡くは從ふ能はず、之を潁川に留め、買田築室し、饑寒の患を除す。旣にして恩を蒙りて北還し、因りて

居す。

これによれば、蘇轍の買田は、自身の嶺南流謫中の家族の生活の安定を圖る目的で行われ、北歸、致仕後はそこに引退することになったのである。常州に致仕した蘇軾がまもなく亡くなったのに對して、蘇轍は政和二年（一一二二）に没するまで、十年餘りの間、許州に閑居している。また、すでに見たように蘇軾が常州に愛着を抱けないままであったのに比して、蘇轍のこの土地の名を取った潁濱先生という號からは、彼のこの土地に對する愛着を感じることができよう。

四 歸田の彼岸化

さて、買田によって現實的に自分の歸るべき所となったにもかかわらず常州への言及が少ないのに比して、知登州以降、再び官についた蘇軾の詩でも依然として蜀への歸田を望む表現が繰り返され、それは惠州、海南島への流謫期を通じて變わることがない。次に、この常州買田後の歸田の表現について考察したい。

さて、この時期の蘇軾の蜀への歸田への言及は、蜀へ歸る人や、蜀の近くに赴任する人に寄せられた送別詩にとりわけ多く見ることができる。例えば元祐七年（一〇九二）に潁州で作られた「送運判朱朝奉入蜀」詩（合註卷三十四）を挙げよう。朱朝奉は施元之注によれば朱世昌を指すというが、傳未詳。

靄靄青城雲	靄靄たり青城の雲
娟娟峨眉月	娟娟たり峨眉の月
隨我西北來	我に隨ひて西北より來たり
照我光不滅	我を照らして光り滅せず
我在塵土中	我 塵土の中に在れば
白雲呼我歸	白雲 我を呼びて歸らしむ
我游江湖上	我 江湖の上に游べば
明月濕我衣	明月 我が衣を濕す
岷峨天一方	岷峨は天の一方にあり
雲月在我側	雲月は我が側らに在り
謂是山中人	謂ふ 是れ山中の人と
相望了不隔	相望みては了に隔てずと

夢尋西南路 夢に西南の路を尋ね

默數長短亭 默して長短の亭を數ふ

似聞嘉陵江 聞くに似たり嘉陵江の

跳浪吹枕屏 跳浪の枕屏を吹くを

まずこの前半部分では、蘇軾自身の蜀への郷愁が生み出す清澄な幻想が描かれている。雲に包まれた青城山は、次句に登場する峨嵋山と同じく蜀の名峰であり、ともに道教的なイメージを持つ山である。そこからはるばるやってきた月の光と雲は、やはりこの世ならぬ清浄なものとして感じられてゐるだろう。ここではこの月光が世塵にまみれた私を冴え冴えと照らしている。天空に掛かる月が、今同じくこの月に照らされているであろう離れた場所、特に故郷や家族を思いやるよすがとなるという構造は、杜甫「月夜」詩（杜詩詳注卷四）の「今夜鄜州月、閨中只獨看。」などが著名だが、ここで故郷から來た月が自ら主體となり、擬人的に私を好意をもって誘うとしてゐることに、蘇軾らしさが現れているのではないだろうか。また、一方の雲は、傳統的に山へ歸るものと考えられているが、これもまた私に、

蘇軾の歸田と賈田（湯淺）

故山、故郷へ歸るよう誘う。月も雲も、世間のどの場所でも誰もが等しく目にするものであるが、それらが故郷と現在の自分の居場所との間を往來しうることに思い当たれば、それらはすぐに彼にとって特別な意味を持つ對象となり、心を通じ合える昔なじみのように自分に親しいものと感じられ、擬人化され得るのである。またさらに言うなら、故郷から來た月と雲がかくも優しく、その幻想の中で彼が故郷へ歸り得るといふ表現は、裏返せば、すでに常州に賈田しそを終の棲家と定めている蘇軾にとって、故郷は今や夢の中でしか歸ることのできない場所になっていることを表すだろう。現實には不可能であるからこそ夢の中の歸田は美しく理想化されるのだ。

送君無一物 君に送るに一物無し

清江飲君馬 清江 君が馬に飲ましめよ

路穿慈竹林 路 慈竹の林を穿たば

父老拜馬下 父老 馬下に拜せん

不用驚走藏 驚きて走り藏るを用ひず

使者我友生 使者は我が友生なり

聽訟如家人 訟を聴くこと家人の如く

細説爲汝評 細しく説かば汝が爲に評せん

若逢山中友 若し山中の友に逢ひて

問我歸何日 我が歸るは何れの日かと問はば

爲話腰脚輕 爲に話せ 腰脚輕くして

猶堪踏泉石 猶ほ泉石を踏むに堪へたりと

後半では實際にこれから蜀へ向かう「君」に對しての言

葉が綴られている。「清江」「慈竹」で象徴される旅路は、

穩やかで快いものであり、家人の如く訴訟を聞き、「君」

のために評してくれる蜀の人々は、家族のように溫かい。

蘇軾にとって故郷の蜀は、人間の溫かさを感じる穩やかで

幸福な場所であり、希求されるべきものである。また、こ

の末尾で蘇軾は依然として自分は蜀への歸田の意志を述べ

ている。

このように、現實の歸田が不可能になればなるほど、詩

に表現される故郷への思いはますます痛切になり、甘美さ

を増していく。同様の例をさらに挙げるならば、後に流謫

先を惠州から海南島へ移される時の「次前韻寄子由」詩（合

註卷四十二）では、次のような表現をしている。

離別何足道 離別 何ぞ道ふに足らん

我生豈有終 我が生 豈に終わり有らんや

渡海十年歸 海を渡りて十年にして歸れば

方鏡照兩童 方鏡 兩童を照らさん

還鄉亦何有 還鄉 亦た何か有らん

暫假壺公龍 暫く壺公の龍を假らん

峨眉向我笑 峨眉は我に向かひて笑ひ

錦水爲君容 錦水は君が爲に容づくらん

海南島へ移されれば、ますます蜀へ歸れる可能性は低く

なってしまうが、それでも蘇軾はいつか子由と共に蜀へ歸

れる日があることを夢想し、うたい續ける。「峨眉」「錦水」

で代表された蜀の山河はここでも擬人化され、子由と自分

に好意的な態度を取ると表現されている。それらは故郷の

人間的な溫もりに繋がる特別なものののだ。

しかし嶺南流謫中の蘇軾は、決して將來の故郷への歸田

を期待していたのではない。むしろ彼はここで骨を埋める

ことになる可能性を感じていたのであり、例えば惠州にお

いては、長子の邁が韶州仁化令の職を求め、家族と共に移
つてくるのを迎え、蘇軾は白鶴峯上に二十間の家を建てて
「終焉之計」(「與陳伯修五首」其四(東坡先生全集卷五十三))
を實行している。夢想され詩にうたわれる歸田は今や現實
にはなり得ないからこそ、かくも優しく、甘美になるのだ。
さらに、嶺南流謫中の歸田の夢想の表現には、もう一つ
の特徴的なパターンが繰り返されている。まず惠州に向か
う旅の途中での「過高郵寄孫君孚」(合註卷三十七)の表現
を挙げよう。

美人游不歸 美人 游びて歸らず

一笑誰當供 一笑 誰か當に供とすべし

故園在何處 故園 何處に在らん

已偃手種松 已に偃せん 手種の松

我行忽失路 我行 忽ち路を失ひ

歸夢山千重 歸夢 山千重

絶望のうちに遙か南の僻地に流されて行く蘇軾の腦裏に、
遠い故郷が浮かぶ。彼が蜀での少年時代に松を植えたとい
う話は、これまでの詩にも言及が見られ、蜀での生活や思

蘇軾の歸田と買田(湯淺)

い出を象徵するものと言えよう。ここでは懐かしい松もも
う倒れてしまったかと思ひ、また現在の自分のどん底の状
態を思えば、故郷と現在の自分との間には、今や千重に折
り重なった山山が存在していることを感じると述べられて
いる。この「千重」は、「歸夢」について感じられるもの
だから、ここでは蜀までの現實の距離というよりも、故郷
へ歸りたいと切實に思う心が感じる心理的な距離感を表し
たものだろう。

同様の表現は惠州での作である「戲和正輔一字韻」(合註
卷三十九)の、「故居劍閣隔錦官(故居の劍閣 錦官を隔つ)」
にも見え、ここでははっきりと「隔」字が用いられている
ことによって、その隔絶がより強く意識されていると思わ
れる。また、この「隔」字を用いる例は、次に挙げる海南
島での「和陶雜詩十一首」其二(合註卷四十三)にも見られ
るが、ここでは故郷との隔絶がより強く意識されている。

故山不可到 故山 到るべからず

飛夢隔五嶺 飛夢 五嶺に隔てらる

眞游有黃庭 眞游 黃庭有り

閉目寓兩景 目を閉じて 兩景に寓る

室空無可照 室は空にして照らすべき無く

火滅膏自冷 火は滅して膏は自ら冷たし

披衣起視夜 衣を披りて起きて夜を見れば

海潤河漢永 海は潤く 河漢は永し

西窗半明月 西窗 半ば明月

散亂梧楸影 散亂す 梧楸の影

良辰不可繫 良辰 繫ぐべからず

逝水無留驛 逝水 留驛する無し

我苗期後枯 我が苗 後に枯るるを期して

持此一念靜 此の一念の靜を持せん

歸ることのできない故郷は、夢の中で飛んでいこうとしても、五つの嶺々に隔てられている。道教の勝地に遊ぶなら我が體內に黃庭宮があり、目を閉じて外界を遮斷すれば内外兩景に宿することもできる。部屋の中には照らされるべきものとて無く、灯火はとうに消え、油も冷えてしまっている。着物を羽織って深夜に起き出し外を見やれば、海は廣くその上に長々と天の川が横たう。西の窓には明るい月

の光が射し、梧楸の葉影を散らばらせている。すばらしい時はつなぎ止めておけず、流れる水はとどめられない。私の子孫は絶えてしまいうだろうな、そう思いながらも心を静めようとする。

ここでも蜀は遠く、幾重にも隔てられた場所と感ぜられている。明るい月の光に照らされた深夜には、遠く南海の孤島に流されたまま時を過ごす悲しみも、自分の内面に堆積し靜かに澄み切ったものになる。西から來た清淨な月の光が故郷への夢想を促すという表現は既に擧げた詩にも見られたものであるし、海を越えて長く伸びる天の川は流謫地からの解放の願望を象徵するものかもしれない。

これらの詩に見られるように、嶺南流謫中の蘇軾は、夢想の中で故郷を山々によって幾重にも「隔」てられた場所としてイメージしている。これは既に第一章で見た鳳翔期の「二十七日、自陽平到斜谷、宿于南山中蟠龍寺」(合註卷四)が「門前商賈負椒笄、山後咫尺連巴蜀。」と、山々を蜀に「連」なるもの、言いかえれば蜀と自分を繫ぐものと感じていたのとは對照的である。つまり、晩年に到るまでに、

蜀は蘇軾にとって遠く離れた歸り得ない場所にどんどん變化していったと言えよう。度重なる左遷、そして常州への

買田がその變化の大きな原因と言えよう。蘇軾はこの海南島においても、もし流謫が許されても、自分が歸るのは蜀ではなく息子たちの待つ常州であると分かっていたはずである。にも関わらず、蘇軾は山々によって隔絶された故郷を夢想し続け、その故郷に家族のように温かな人情と、穏やかで優しい自然物を思い描いている。つまり、歸り得ない故郷はついに閉ざされた理想郷、樂園としての姿を獲得するに到ったのである。

すでに前章で見たように、嶺南流謫中の蘇軾の詩に常州の土地に觸れるものは少なく、さらにその少ない例が常に息子たちの耕作の苦勞を思う表現を伴っているのは、これと對照的である。つまり、現實においての故郷への歸田を斷念した時、蜀は蘇軾の夢想に屬するものとなり、いかなる苦勞も予想されない彼岸の樂土のイメージを強めていくのだ。蘇軾の意識の中では、依然として故郷への歸田の夢想と現實の買田の間に深い斷絶が存在しているのではないだ

蘇軾の歸田と買田（湯淺）

ろうか。

*

最後に、北歸後の状態についても少し觸れておきたい。

元符三年（一一〇〇）五月、六十五歳の蘇軾は流謫先を海南島から廉州（現廣西チワン族自治州合浦縣）に移され、遂に十一月には朝奉郎に復され、提舉成都玉局觀を授けられて自由の身になった。既に許州（現河南省許昌市）に買田致仕していた弟の子由の強い勧めで、一時は子由とともに許州に住まう決意をしたことが、残された何通かの友人宛の尺牘^⑩から窺われる。しかし、北方は物騒だと友人たちに忠告され、結局常州に定住することにしたらしい。弟や友人の言葉によって定住する先についての考えを容易に變えていることから、蘇軾が最後まで常州の土地にそれほど強い執着を抱いていなかったことが窺われるのではないだろうか。翌、徽宗の建中靖國元年七月、蘇軾は常州に没した。もう少し生きていれば、彼は常州にもそこなりの楽しみを見つけ、愛着を持って詩にうたったかもしれない。しかし時はそれを許さなかった。

む す び

北宋期の士大夫は一般的に、吏隠を楽しもうとする傾向を持ち、蘇軾もまた官吏としての生活を始めた當初から地方官舎での閑居を試みているが、その一方で、故郷、蜀への歸田を願う心情を、その詩文に表現し続けている。その後蘇軾は黃州に流謫されるに及んで、故郷への歸田の斷念を餘儀なくされるが、彼は流謫地に故郷と繋がる風物を見出し、また持ち込むことで心の安らぎを得ようとしている。

また、買田徙居を實行した常州においても同様に故郷との繋がりが求められ、歐陽修ら自ら選んだ土地への買田を喜びとした人物とは異なる様相を見せている。またこの買田によって蘇軾の故郷への歸田の可能性はさらに小さくなったが、彼はその後も故郷への歸田の夢想を詩にうたい続け、嶺南流謫中の作品においては、失われた故郷は次第に山の彼方の閉ざされた樂園としての姿を獲得していく。土地から土地へと移動を続け、身分の浮沈を繰り返す蘇軾にとって、變わることのない定點である故郷は、常に心の據り所

として求められ、もう歸れない場所であるからこそなおさら、詩的描寫のなかで純粹化、理想化されていったのである。

注

本稿で引用した蘇軾の詩の底本には、清・馮應榴『蘇文忠公詩合註』（中文出版社 一九八二年再版）なお、本文中では『合註』と略稱する。を使用し、文の底本には文中で特に示したものを除き、内閣文庫・宮内廳書陵部藏『東坡集』（古典研究會叢書漢籍之部 16 汲古書院 一九九一年）を使用した。また、作品の制作年代は清・王文誥『蘇文忠公詩編註集成總案』（巴蜀書社 一九八五年）によった。

① 拙稿「蘇軾の吏隠——密州知事時代を中心に——」（中國文學報第四十八冊 一九九四年四月）

② 「倦遊行老矣、舊隱賦歸哉。東望峩眉小、廬山翠作堆。」（出城送客不及步至溪上二首其二 合註卷十三）

③ 「吾昔少年日、種松滿東岡。初移一寸根、瑣細如挿秧。二年黃茅下、一一攢麥芒。三年出蓬艾、滿山散牛羊。不見十餘年、想作龍蛇長。夜風波浪碎、朝露珠璣香。我欲食其膏、已伐百本桑。人事多乖迕、神藥竟渺茫。（中略）却跡五百年、騎鶴還故鄉。」

④ 例えば、鳳翔赴任のため初めて子由と分かるときの「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇

寄之」(合註卷三)に、すでに「寒燈相對記瞞昔、夜雨何時聽蕭瑟。」の句が見える。また子由も後に「再祭亡兄端明文」(樂城後集卷二十)で、「昔始宦遊、誦韋氏詩。夜雨對牀、後勿有違。」と述べている。

- ⑤ 「元豐四年」九月二十二日、書『歸去來集字詩』。「(同五年)二月、筠守毛國鎮將歸來、求贈言。爲書『歸去來詞』作跋」。「三月三日、作『陶淵明飲酒詩跋』」。「(同月)董鉞來游雪堂卜鄰意、公約『歸去來詞』作『哨遍』使其家僮扣牛角而歌之。」

- ⑥ 「元豐七年八月」遣蔣親求田宜興。詰案、公初登進士第、與蔣之奇聯宴席、有卜居宜興之約。」

- ⑦ 「若東坡之居宜興、乃因免汝州居住而至、其後自海外北還、無以爲歸、復暫至常州、已而捐館。文定公雖居許、而治命反葬於眉山云。」また同じく南宋の羅大經『鶴林玉露』(中華書局 唐宋史料筆記叢刊本)甲編卷一の「仕宦歸故鄉」の條でも、歐陽修が父母を葬ってから、本籍地の吉州に歸らず、潁昌の山水を好んで「思潁詩」を作り、ついにはここに居したことを批判している。

- ⑧ 本文中に挙げた竺沙氏論文、及び同氏の「宋代墳寺考」『中國佛教社會史研究』同朋社 一九八二年 所收)で考察されているように、故郷の土地や墓の管理は故郷に住む族人や隣人、または墳庵に委託された。なお、墳庵とは言えないが、『嘉祐集』卷十五の「極樂院造六菩薩記」によると、蘇

蘇軾の歸田と買田(湯淺)

洵は妻程氏の没後、二子とともに蜀を離れるにあたって、寺院に菩薩像を寄進し、一族の死者の冥福と自らの旅の平安を祈っている。

- ⑨ この詩の本文は以下の通り。「岷山之陽土如腴、江水清漪多鯉魚。古人居之富者衆、我獨厭倦思移居。平川如手山水聲、恐我後世鄙且愚。經行天下愛嵩嶽、遂欲買地居妻孥。晴原漫漫望不盡、山色照野光如濡。民生舒緩無天札、衣冠堂堂偉丈夫。吾今隱居未有所、更後十載不可無。聞君厭蜀樂上蔡、占地百頃無邊隅。草深野闊足狐兔。水種陸取身不劬。誰知李斯顧秦寵、不獲牽犬追黃狐。今君南去已足老、行看嵩少當吾廬。」
- ⑩ 例えば「與程德孺四首」其三(東坡先生全集卷五十六)に、「某此行本欲居淮浙間、近得子由書、苦勸來潁昌相聚、不忍違之、已決從此計。」とあり、また「與子由弟十首」其八(同卷六十)に「兄近已決計從弟之言、同居潁昌、行有日矣。適值程德孺過金山、往會之、并一二親故皆在坐。頗聞北方事、有決不可往潁昌近地居者。今已決計居常州、借得一孫家宅、極佳。浙人相喜、決不失所也。更留眞十數日、便渡江往常。逾年行役、且此休息。恨不得老境兄弟相聚、此天也、吾其如天何、然亦不知天果於兄弟終不相聚乎。」とある。
- 付記 本稿の要旨は京都大學中國文學會第十一回例會(一九九六年六月二十九日 於京都)において、「蘇軾の歸田と買田」の題目で口頭発表したものである。貴重なご意見、ご教示を賜った方々に、厚く御禮申し上げます。